

僕は成海タダシ。僕の家、成海家は、かつて財を成した一家だった。今も大きな家に住んでいる。

だが僕は一人っ子で寂しく育った。

だが僕は、この春、遠方への進学のため実家を離れてひとりで暮らすことになった。

いいと言うのにお手伝いさんの爺さんもついてくることになったが、

そんな時、お手伝いの爺さんが倒れてしまった。

僕の一人暮らしの家には代わりのお手伝いさんがやってくることになった。  
ずっとうちと付き合いのあるお手伝いさんの娘さんらしいけど…。



引越しの日、彼女はやってきた。

「室川さや子です よろしく…。」

えらい色っぽい人だ…。だが、その時、僕はまだ性について うとかった。  
てきぱき家事をこなしてくれる彼女に普通に感謝していた。

そして、その夜だ。

彼女は僕の隣で寝た。

女だったら箱入り娘のような状態で育ち、  
性に敏感でない僕は、普通のことと思っていた。

そんなはずはなかった。

気がつくと、僕は勃起させられていた。

「あら…。タダシちゃん…。思ったより大きいし硬いのね…。気持ちよさそう…。おねえさんに童貞ちょうだいね？」

びく♡

「え…！？えっ！？」何が起きているのかわからなかった…。だが。

くちゅっ…。一気に暖かさに包まれた。そして、亀頭から根本までぜん動運動で締め付けられ、瞬く間に射精感に導かれそうになる。

「んふふ…。私のおまんこ 名器って評判なの…。動かさなくても力の入れ加減でこうやっておちんぼ搾れるしね…。」

「うっ…！ああっ…あっ！」

くちゅ♡

びく♡

びく♡

あはは♡

あはは♡

上下運動に啞えて、搾り上げるような膣内の動き。

ぐにぐにの膣肉とねちよねちよと絡みつく愛液、  
ミミズ天井がカリ首を刺激する。

「良いのよ…？ イっちゃっても、何回もおねえさんのおまんこに…  
子宮に出しちゃっていいんだから」

「で…でも…妊娠…」

「ばかね 生でやってる時点で妊娠のリスクがあるんだからそんなこと気にしないの」

「抜かないと！」「ほんとうにばかね 妊娠の可能性をどんどんあげなきゃって言うてるの  
子宮口開いて待ってるんだから…。はやく射精して…？」

「うあっ…。待つて…。本当に出っ…！」

「いいのよ…出して…。いっぱい出して？ さや子を妊娠させて？  
あなたの子種、さや子の子袋にびちゃびちゃ注いでえっ！」

おねえさん♡  
いい♡  
出して♡  
中♡  
おねえ♡

ガッ！  
おまんこ♡  
ガッ！

おまんこ♡  
おまんこ♡  
おまんこ♡



「ああああっ！ああっ！ああーっ！」

「あーっ！あっ！ああっ！あっ！」

「ああっ…。いいわあ…。いっぱい出てるわ…。もっと…。もっと…。」

さや子は、膣内を搾り上げ、一滴残らず子宮内に精液を運ぶ。

ドクドク

ドクドク

わっわっ!!  
わっわっ!!  
わっわっ!!

わっわっ

わっわっ

わっわっ



騎乗位で漏れ出した精液が結合部から溢れる。

「んっ…。はやく受精して着床するといいわね…。」

「さ…さや子さん…なんで…。駄目だよこんなの…。」


「欲しいの…。あなたの子供が欲しいのよう…。」

さや子が既成事実を作り、成海家の財産を狙っていることは想像に難くない。  
この時点でタダシにはわからなかったが…。

「さあ 確実に孕ませてね…。確率を上げることはできるんだから  
朝まで私と妊娠交尾しましょ」

さや子さんの口から出る言葉がいちいちいやらしかった。  
だがタダシは、知らされてしまった性の世界にドブプリと溺れていく…。





学校もおろそかになり、この一週間、食事と睡眠以外は、  
ずっとさや子と交尾していたタダシ。

子宮から溢れ出るほど精液を注いで、汗まみれ、よだれまみれの  
身体を激しく重ね合わせていた。

そんな時、タダシ宅にむかうもう一人の女性の姿があった。  
室川菜穂子、さや子の姉である。

「さや子ったら変な事してないかしら…。」

はじめ、お手伝いは菜穂子が行くはずであった。が、さや子が  
それを押し切って向かったのだ。

もともと、危うくだらしのない性格のさや子を心配して  
菜穂子がこうして部屋に向かったのだが…。



「いいわ…。エッチうまくなってきたのね…。おねえさん気持ちいいよ」

「さや子さん…。」もう数十回も肌を重ねて、お互いの性感帯を把握してきている。

「いい腰の動き…。妊娠させることしか考えてないけどものの動きね…。

ほんとうに交尾って感じ。発情しきったおサルさんみたい」

「さや子さんの腰も…。」

「私も発情したメス猿ね」

ふたりで腰を振りながら性器をうちつける。

「ああんっ！すごいっ！龟头が生で子宮口こじ開けてるっ…！

鈴口から我慢汁漏れて…。我慢汁だけで妊娠しちゃいそう…。

もう精子を卵子に向けて今にも発射しそう…！」

はあはあ♡♡♡  
はあはあ♡♡♡  
はあはあ♡♡♡

はあはあ♡♡♡  
はあはあ♡♡♡  
はあはあ♡♡♡

あっ!!  
あっ!!

「んうっ…出そう…です…！」  
「言わなくても良いのよ…。好きなときにドピュドピュ  
私の子宮におもいきり射精していいのよ？」

「さや子さんっ…！」

ハッ  
ハッ

「んっ！龟头がビクビクしてるっ！子宮の中まで  
入る長くてエッチなおちんぽがっ…！  
私の卵子を受精させようとして…。精子出そうとしてびくびくしてるっ…！」

ハッ  
ハッ  
ハッ  
ハッ  
ハッ  
ハッ

「ああっ…出るよっ…さや子さんのおまんこ気持ちよすぎて…！  
身体も最高でっ…！出るっ…！」  
「出してっ！どろどろ濃ゆいあなたの精液いっぱい出して！私を孕ませてっ…！」

「んあっ! ああーっ! 入ってる! 出てるっ! 子宮に濃ゆい精液がっ…!  
どぴゅどぴゅ射精されてる!」

「あああっ…! 気持ちいいっ…! あああっ…!」

あはははっ!!  
あはははっ!!  
あはははっ!!  
あはははっ!!  
あはははっ!!  
あはははっ!!  
あはははっ!!

びん  
びん!!

ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド

ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド

ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド

「どろどろ流れてるっ…! お腹がたぷたぷしちゃう…。  
ああっ…。妊娠しちゃう…。お母さんになっちゃうっ…。」

びん  
びん!!  
びん!!

びん!!

「さや子さん…。」

「ふふっ…もう一回？いいわよ…。今日も朝まで交尾しましょ  
妊娠するまでずーっと私の子袋に射精してね…。」

ビク…

ビク…

ビク…

ビク…

♡  
いっしょ…♡


いっしょ…♡

♡  
いっしょ…♡

びゅん  
びゅん

びゅん  
びゅん

びゅん  
びゅん




その光景を菜穂子は影から見てしまっていた…。

「なんてことを…。さや子ったら…。」

ここまで困った女になっていたなんて…。

いけないわ…私がなんとかしなきゃ…なんとか…。」





と、思いながらも、激しい交尾を続けるふたりに割って入るタイミングもなく、二人が疲れ果てる朝まで菜穂子は待った！

我慢できず、何回もオナニーしてしまったのは秘密だ…。

そして、菜穂子が部屋に侵入する。

「さや子っ！！いけませんよっ こんなことをしては…！」

「菜穂子姉さん…。なんの用よ」

「私はさや子が心配だから…！とにかくっ 私もお手伝いをしますっ！」

と、菜穂子もおてつだいに加わったのはいいのだが、  
味を占めたさや子は、ついに手伝いの仕事を菜穂子に押し付け、  
朝から晩までタダシとセックスをするのだった。

こうなると菜穂子はたまったものじゃない。  
すぐ近くで男と女が四六時中まぐわっているのだ。

一日に溜まったむらむらを、お風呂場で解消する菜穂子。

「ああっ…。いけないわ…。妹のセックスを見て興奮してオナニーするだなんて…。  
ましてやお手伝いの身なのに…！」

お湯にオナニーの愛液が混ざっていく…。菜穂子はクリトリスを  
つまみ、絶頂する。



「んっ…んんっ…気持ちいいっ…あっ…。」

んんんん  
んんんん  
んんんん

グ  
グ  
グ  
グ  
グ  
グ

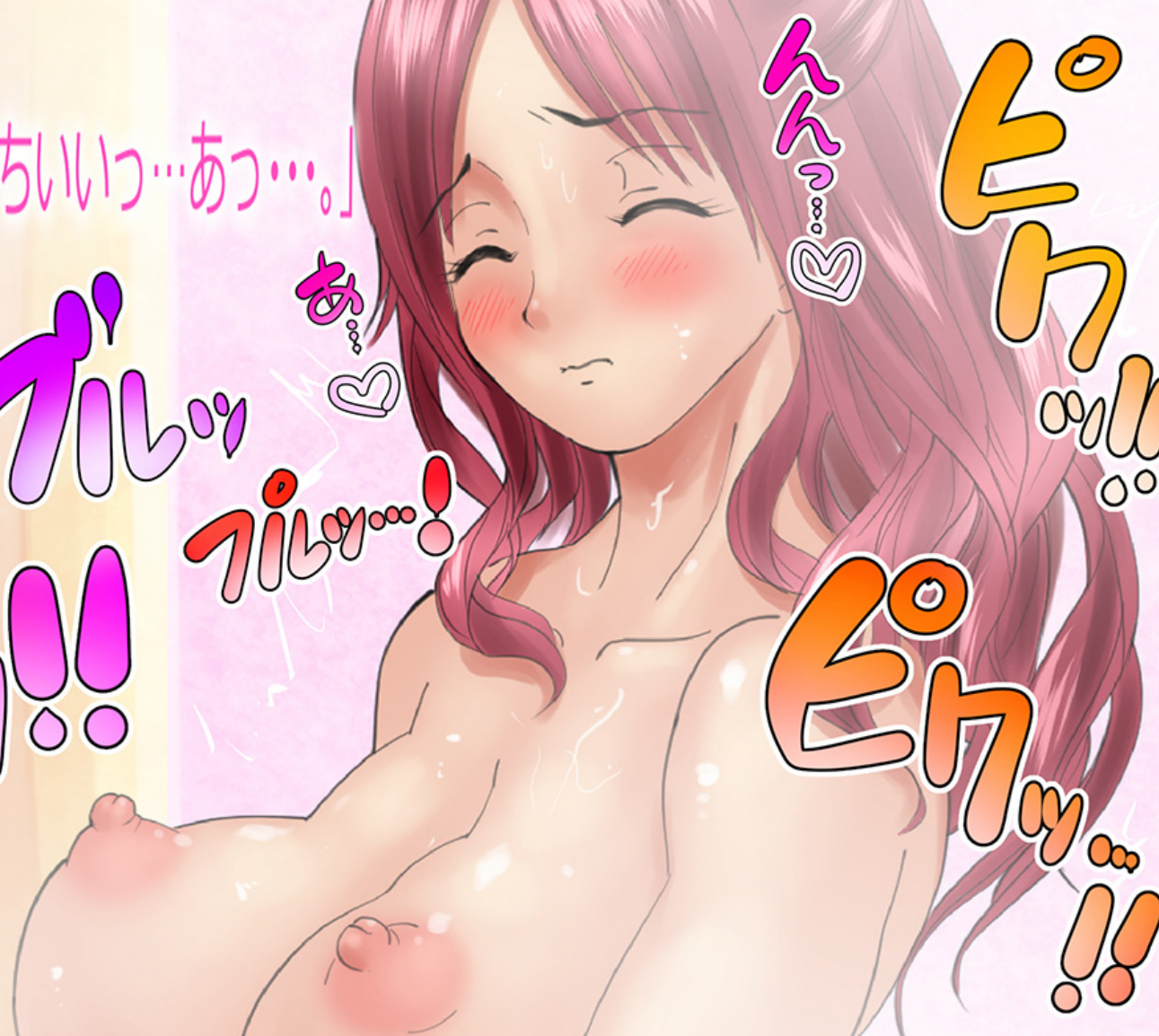
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

んんんん

んんんん

んんんん

んんんん



ぬるぬるとした指先と、身体の火照り。そして気だるい疲労感。

はあ...  
はあ

はあ

(それにしても…。タダシさんのおちんちん…。ガチガチで素敵だったわ…。あれが私の中に入ったら…。

どわ♡

どわ♡

って いけない…私ったら何を考えているのかしら…！)

ブル...

ブル

もじもじ

と、思いつつもオナニーを再開してしまう…。  
が、その時、視界に入ったのはまさにタダシの股間だった。

「きゃっ…。あなたたち…入ってきちゃ駄目っ！」

あわてて身体を手で隠す菜穂子。

「菜穂子姉…。オナニーしてたでしょ  
そうよね 我慢できるはずないよねー  
生で中出しセックスを朝から晩までだもんねー」

「そっ…そんなことっ…！」

「このおちんぽ…すごいよ…。  
やっぱり若さかしらねー 全然萎えないの  
菜穂子姉にも味あわせてあげてもいいよ」

「えっ…！？」

「タダシくんも菜穂子姉と  
セックスしたいって 私が許可してあげたの」

「あ…。」タダシのチンポはフルに勃起していた。

「駄目よ！ いけません！ さや子…！  
私達はお手伝いできてるだけなのに」

「こっちのお手伝いをしてあげてるんじゃない」  
「さや子…やめてっ…ああっ！」

さや子に動きを封じられ、愛撫される。  
菜穂子は目の前にタダシのチンポが  
指し出せれると、吸い寄せられるように  
腰を振ってしまっていた。

「あっ…。いやっ…私…こんなイヤらしい女じゃ…！」

「自分から腰振ってるなんて…。やっぱり私達姉妹ねー」

「違うの…。ああっ…あ…！」

チンポが今まさに菜穂子の中に…。

「菜穂子さん…！」

「あっ…ああっ！駄目っ！あーっ！」



「ああっ…駄目っ…ああっ!?気持ちいいっ…んんっ！」

「菜穂子姉に生で入ってるよ…。」

「おおっ…菜穂子さんの膣内もっ…気持ちいいっ！」

「あ…あ…。」

「奥まで…。はあっ…！」

「あ…あ…これがおちんちん…。」

菜穂子の結合部からは血が流れてきた。

「菜穂子姉まさか処女だったの？」

「う…。う…。さや子…。あなたが軽すぎるのよ…。」

すっぴんっ♡

ブル…

ビク…

ちゅ♡

「やったわねタダシくん 菜穂子姉の処女  
いただきちゃったわよー」

「は…はい…。」

ちゅ♡ちゅ♡

ブル  
ブル

「すごいでしょ？菜穂子姉 どこまで届いてる？」

「んあっ…たぶん奥まで…。ああんっ！」

「欲しかったのね おちんぽが…。おまんこが悦んでるみたいよ」

「そんなこと…なっ…ああっ！」

「動いてあげて」「はいっ」

「ああっ！すごいつ！ああっ！あっ！ああっ！」

「うあっ！締め付けがっ！」

「処女まんこの締め付けねーこれはこれで気持ちいいわよね」

「うっうっ やばい…出ちやいそう…」

「えっ！？嘘っ！？ああっ…！」

「出ますよ…！出るっ！」

「待って…妊娠しちゃう…外に…外に出してっ！！」

「出るっ！あっ！」「待って！ああっ！」

あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ

あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ  
あ  
ん  
っ